

2022年度(令和4年度)学校評価自己評価表

神辺西中学校区	校番 74	福山市立神辺小学校
最終更新日	2022年(令和4年)10月1日	

I 福山市

<p>ミッション 福山に愛着と誇りを持ち、変化の激しい社会をたくましく生きる子どもを育てる。</p> <p>ビジョン 「福山100NEN教育」の基本理念のもと、各中学校区・学校が「21世紀型“スキル&amp;倫理観”」の育成に向けた特色ある教育課程を編成し、日々の授業を中心として評価・改善を進めながら、子どもたちの確かな学びを実現している。</p>
---

II 中学校区

<p>前年度学校関係者評価の主な内容</p> <p>1.児童が学び方の経験を活かしたカリキュラム編成や学級単位にとられない授業形態等を工夫する。</p> <p>2.PDCA サイクルをもとに、児童生徒の学びや活動を充実させ、改善を図る取組を継続していく。</p>	<p>児童生徒の現状</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 学びの伸びを把握する調査では、現状学年のレベルに達していない児童がいた。</li> <li>• 小中ともに児童生徒が自ら動き、生活をよりよくしようとしている。</li> <li>• 「体力づくりに取り組んでいる」肯定的解答85%。新体力テストは2021年度、接触をさせて実施。県平均を越えた割合11%。</li> </ul>	<p>育成する力 (21世紀型“スキル&amp;倫理観”)</p> <p>めざす子ども像 (義務教育修了時の姿)</p> <p>中学校区として統一した取組等</p>	<p>スキル：知識・技能 思考力・判断力・表現力 学びに向かう力 倫理観：思いやり</p> <p>知：自分の考えを持ち伝え合う子 徳：人の気持ちがわかり協力できる子 体：健康でねばり強い子</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 「子ども主体の学び」全教室展開の実現を目指した授業改善の継続</li> <li>• 児童生徒による生徒指導(生活のきまり)の見直しの継続</li> <li>• 神辺西中学校区における「21世紀スキル&amp;倫理観」の評価規準による個に応じた支援の継続</li> </ul>
---	--	--	---

III 自校

<p>ミッション</p> <p>伝統を現在に生かし、未来を生き抜く人を育てる。</p>	<p>育成する力 (21世紀型“スキル&amp;倫理観”)</p>	<p>知識・技能</p>	<p>思考力・判断力・表現力</p>	<p>学びに向かう力</p>
<p>学校教育目標</p> <p>ひとりひとりの命を生かし 育てる教育の実現</p>	<p>めざす子ども像</p>	<p>既習事項と新たな知識・技能を関連付け、思考・判断・表現の場で活用できる知識・技能として定着している。</p>	<p>課題解決のために必要な情報を収集し、比較・分類したり関連付けたりして、筋道立てて考え、表現している。</p>	<p>既有的知識と関連付け、自ら課題を見つけ選択するとともに、学習の仕方や進め方を振り返り、次の学習や生活に生かそうとしている。</p>
<p>現状</p> <p>&lt;児童生徒&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 自分や友だちのためになることを考えて実行できている」と自己評価する児童は全体の93%であり、増加している。自分の周囲に対してだけでなく、学校や地域に貢献しようとする気持ちが育っている。更なる実践力育成のため、PDCA サイクルに基づき、活動の改善を図る機会を増やす必要がある。</li> </ul> <p>&lt;授業&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 児童が自己の学力を伸ばしていけるように、教員が、児童一人一人の伸びを見取る評価力を高めていく必要がある。</li> <li>• 児童の学びに向かう姿には、個人差があり、児童の発言に対して柔軟に対応し、学びを繋げていく教師のファシリテーター力を高めていく必要がある。</li> </ul>	<p>テーマ</p> <p>研究 内容等</p> <p>めざす授業の姿</p>	<p>自ら学び続ける子どもの姿を目指した仕組み</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 児童が自ら学びをデザインする <ul style="list-style-type: none"> <li>• 児童が自分の関心や習得の段階に応じて課題や学習方法を考え、選択する。</li> <li>• 児童自身が学びのプロセスに目を向け、学び方を修正したり、自己の伸びを実感したりできる振り返り</li> <li>• 「学びファイル」を活用した自己の伸びの蓄積</li> </ul> </li> <li>2 子どもたちの多様な学びを尊重した授業 <ul style="list-style-type: none"> <li>• 教科・学年を越えた学びのカリキュラム</li> <li>• 総合的な学習の時間の単元開発(縦割りでの学び、教科・興味発、個人テーマ)</li> <li>• 児童の学びの過程に即した評価方法の見直し及び教員の評価力向上</li> </ul> </li> </ol> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 児童が主体的に取り組み、学び楽しさを味わうことのできる授業</li> <li>• 身に付けた既習事項を活用して、新たな課題を解決することのできる授業</li> <li>• 友だちと共に学ぶよさを実感できる授業</li> </ul>		

IV 目標・取組及び評価指標等の設定と評価

福山市立神辺小学校

年 目	中期経営目標	重 点	分 類	短期経営目標	目標達成に 向けた取組	評価指標	中間評価(10月1日)			最終評価(2月末)					
							□指標に係る 取組状況	力 <sub>セ</sub> 達 成 <sub>セ</sub> 評 価	達成 評価	改善方策	□指標に係る 取組状況 ◎短期(中期)経営 目標の達成状況	力 <sub>セ</sub> 達 成 <sub>セ</sub> 評 価	達成 評価	総合 評価	改善方策
3	自己の学びを デザインでき る児童の育成	★	継 続	児童自身が学び のプロセスに目 を向け、学び方を 修正したり、自己 の学びを実感し たりできる振り 返しを行う。	<ul style="list-style-type: none"> <li>単元の前で自己の学びの段階や伸びを記録し、比較したり、他単元及び他教科、生活等とつなげたりできる振り返り方法やシートを工夫する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>児童アンケートを通して、自己の学びについての満足度を90%以上に上げる。</li> <li>教員の振り返りや児童の具体的な伸びの姿を、学期に1回以上交流し、課題の取組ができていないか前期・後期で学年間で分析する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>児童アンケートの肯定的回答は、「学習課題を決めたり、選択したりして学習を進める」83.4%、「考えたことを文や言葉で表し振り返る」83.3%という結果である。8割の児童が肯定的に自己の学びを捉えているものの、目標には届いていない。</li> <li>授業づくり研修や校内授業研を行い、本校の授業づくりの重点を協議・共有した。各研修の中で、教員が自身の授業をふりかえり交流を行った。</li> </ul>	3	3	<ul style="list-style-type: none"> <li>「書く考える」授業を目指し、その重点や流れを教員及び児童で共有することで、児童が学び方や自己の学びを自覚できるようにする。 【授業の流れ】 ①課題発見・見通し ②書く ③学び合い (比較・関連づけ等) ④再整理一書く</li> <li>「何を考え、何を書くか」「児童はいかに学んでいたか」の視点で「書く考える」授業をつくり、振り返る。</li> </ul>					
1			新 規	子どもたちの多 様な学びを尊重 し、教科・学年を 越えた学びのカ リキュラムを開 発する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>「認知の仕組み」をもとに、教員が、児童の具体的な姿から「学び」について話し合う場を設定する。そして、それをもとに、4月に作成したカリキュラムの修正を重ねていく。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>カリキュラムマップの改善を継続する。</li> <li>教員の振り返りや具体的な取組事例及び児童の学びの姿を、学期に1回以上交流し、成果と課題を挙げる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>児童の学びや授業づくりを協議する研修等を通して、日々カリキュラムマップの検討を行っている。学習内容の関連や実態を踏まえ検討した。</li> <li>「学びの伸びを把握する調査」では、「学び方」に対する児童の意識の低さが見られた。</li> </ul>	3	3	<ul style="list-style-type: none"> <li>「書く考える」授業を行い、自身の学びをふりかえる場面を設けることで、児童が学びを実感できることを目指す。</li> <li>カリキュラムマップの見直しの際、入れ替えや複合の理由を欄外に記入し、検討しやすくする。</li> </ul>					
				基礎基本の学力 の定着を図る。	<ul style="list-style-type: none"> <li>帯タイムを活用し、自ら復習や予習ができる取組を行う。</li> <li>学力テストの分析を行い、授業改善ポイントを見出す。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>学びの伸びを把握する調査における回答率が前年度を上回る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>学力調査の結果、同一児童での前年度との回答率を比較すると、わずかに市平均との差が縮まっており、伸びが見られる。しかし算数の問題、そして無答率が高いという課題が大きい。</li> <li>帯タイムの時間を基礎的内容の定着の時間とし、その使い方や内容の見直しを行った。</li> </ul>	3	2	<ul style="list-style-type: none"> <li>「書く考える」授業の実現により、自分の考えを書き整理するとともに、学力調査分析から見出した各教科の重点ポイントや、各学年の取組を実施する。</li> <li>帯タイムの内容を精選し、短時間で集中する学習の習慣化を図る。</li> </ul>					



3	児童の教育環境をデザインする取り組みを推進する。	継続	小中一貫教育の推進を図り、その取組を検証し、情報発信する。  教職員一人一人の働き方に対する意識の醸成を図る。	<ul style="list-style-type: none"> <li>小中合同研修会を年間2回以上、各部の主任・主事による連携を3回以上行う。</li> <li>幼保小合同研修会を年間2回以上実施する。</li> <li>超過勤務45時間以内を目指し、教職員の主体性を尊重した自己管理を行う。</li> <li>行事及び準備時間の精選や教科横断的な単元づくりを通して、子どものために学びづくりに向けた場や時間を確保する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>小中合同研修会で話し合った内容を精選し、特に生活のきまりを工夫改善する。</li> <li>特別支援教育の視点に「授業参観や協議を行い、日々の実践に生かす。</li> <li>学年単位で、45時間以内を意識し、各主任が定期的に声をかけることを100%にする。</li> <li>職員アンケートにおいて、「子どもたちのために使える時間を確保できている。」と肯定的評価する職員を90%以上にする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>小中合同研修会では、不登校・長期欠席児童生徒についての実態把握とともに、講師を招いて、取組実践例について研修を深めた。</li> <li>特別支援学級の授業研修会を行い、個に応じた授業づくりについて学んだ。</li> <li>学年単位で45時間以内を意識し、声かけを行った教職員は82.8%となった。また、年休を取ろうDAYや長期休業日の積極的な年休取得を行った。</li> <li>行事及び準備の精選や単元づくりを工夫しているものの、子どものために使える時間を確保できている職員は68.6%であった。</li> </ul>	3	3	<ul style="list-style-type: none"> <li>不登校・長期欠席児童生徒を減らすためにも学力向上に向けて、小中の授業を見合う研修を行い、自分の考えをもつためにも書く力を育てる授業づくりに取り組む。</li> <li>幼保小との連携を図るために、各保育所、幼稚園へ職員が出向き、実態把握を行う。また、幼保職員と小学校職員が協力して、絵本をもとにした教材研究を進めていきたい。</li> <li>各主任が率先して、声かけを行い、仕事の時間配分を計画的に行っていく。</li> <li>組織的な取組を進めるために推進計画を作成することで、業務改善と人材育成につなげていく。また、下校時刻の工夫や校務分掌及び学年事務における役割を再度見直し、見直しを持って取り組んでいく。</li> </ul>							
---	--------------------------	----	---	---	--	---	---	---	--	--	--	--	--	--	--	--

[プロセス評価の評価基準]		[達成評価の評価基準]		[総合評価の評価基準]		
評点	評価基準	評点	評価基準	評点	評価基準	
5	取組の目的に対する共通理解が顕著に認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が十分に図られた。	5	目標を大幅に達成し、十分な成果をあげた。	5	100%以上の達成度	十分に目標を達成できた。
4	取組の目的に対する共通理解が認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が概ね図られた。	4	目標を概ね達成し、望ましい成果をあげた。	4	80%以上100%未満の達成度	概ね目標を達成できた。
3	取組の目的に対する共通理解が一定程度認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決がある程度図られた。	3	目標をある程度達成し、一定の成果をあげた。	3	60%以上80%未満の達成度	ある程度目標を達成できた。
2	取組の目的に対する共通理解が認められ難く、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決があまり図られなかった。	2	目標を下回り、成果よりも課題が多かった。	2	40%以上60%未満の達成度	あまり目標を達成できなかった。
1	取組の目的に対する共通理解が認められず、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決が図られなかった。	1	目標を大きく下回り、成果が認められなかった。	1	40%未満の達成度	目標を達成できなかった。